

調査者：信州大学農学部森林科学科教授 北原曜
森林総合研究所水土保持研究領域
危険度評価担当チーム長 岡田康彦
山地災害研究室 小川泰浩
治山研究室 小川明穂

所見

- ・ 上空からの調査では、発生源は赤川上流の地獄谷と考えられる。
- ・ 火山灰を含んだ多量の水が赤川を流下し、赤川と白川の合流点から下部に堆積していた石礫を濁沢川に押し流したものと考えられる。
- ・ 土石流としては規模が小さく、これまでに設置されていた治山ダム群によって減勢されたと考えられるが、林野庁が設置したワイヤーセンサーの下流まで到達していた。
- ・ 大きな石礫は、伝上川と濁沢の合流点直下に設置された治山ダム付近で止まっていたが、細粒分は更に下流まで流下して、林野庁が施工中であった除石箇所ではほぼ捕捉され、更に下流で長野県が施工中であった除石箇所にも一部流下し捕捉されていた。
- ・ 依然として火口周辺には火山灰の堆積が認められることから、大雨の際には今回と同様の堆積土砂の流下が発生する可能性も否定できないが、今回と同程度の土石流では、王滝川との合流点までは到達しないと考えられる。
- ・ このため、緊急の対策としてこれまで実施している除石工事を継続することは、有効な手段と考えられる。
- ・ また、雨量観測やセンサー類による監視を組み合わせ、降雨と石礫の移動との関係を明らかに出来れば、今後の警戒避難を判断することにも役立つものと考えられる。